

マルティネルの街角で

YKI 国際特許事務所 弁理士◇葦原 エミ

Vol.25 やっぱり講演が好き！

「デスクワークと数時間の講演と、どっちが好き？」と聞かれれば、迷うことなく後者を選ぶ。

という筆者でも、初めて 80 人ほどの受講者を前にして“講演”なるものを行ったときの賛辞、違った、「惨事」は忘れない。3 時間の講演は「困った!!!」の気分で始まった。

何しろ初めての講演だったから、パワポのスライド 16 枚を 1 枚に印刷し、ここはだいたい何時何分ごろ、なんて詳細な時間配分を決めてメモって、準備万端！ と思っていたら、あにはからんや、司会者からのご紹介があるという大誤算！（いや、普通あるだろう）。

ちょっと遅れての開始だったことに加え、「今日は、弁理士の葦原エミ先生にご講演いただきます」から始まり、いえ、そんなことまで紹介いただかなくても、みたいな筆者の紹介が続くと、既に 8 分が経過。

この中途半端さで筆者のスライド時間割りは見事に崩れる。心はムンクの「叫び」状態。「うお～、8 分ずつ足すのかよ」。

そもそも、講演者から見て正面の壁に時計がない。加えて、自分の腕時計を見る心の余裕がない。

「い、今、何時何分？」と焦り始めると、もう、残りの時間がどのくらいあるかも分からない。

「はい、これで終わりです！」と言ったときの、「え、もう？」と訴える司会者の視線といったら。。

で、延々、質疑応答に入ってしまったのです。まる！

これに懲りて、その後、スライド時間割りなんて馬鹿なメモ書きはしないようになった。

筆者は努力の人である。「よし、どのくらい話せば何分ぐらいになるかを身体で覚えるぞ！」と決めた。

ジムの「トレッドミル」で走りながら練習してみる。これって、効果てきめんである（やってみてね。でも、少しさぼると時間感覚は元に戻っちゃいます）。徐々に壇上から空気を読むような余裕も生まれ、「一方通行」から、ちっとばかり「インタラクティブ」もできるようになってきた。講演は生モノだもんね。

が、誰もが筆者の話を聴きたいと思って来るわけではない。「会社から行けと言われたんでね」。

いや、そりゃ分からないでもないが、寝ている人を見ると落ち込む。さすがの筆者も起こしには行けない。今度、行こうかな。

受講者の反応が分かりやすい回もあれば、全く分からない回もある。3 時間、本当に全く盛り上がりず、「ああ、誰も満足してくれない、いまだかつてない最悪のデキだ」と思って絶望に打ちひしがれていたら、アンケートが異常に良かった、ということもあった。

おーい、みんなー、楽しいときは楽しいオーラを出そうよ！

という数々の失敗や学びを経て、今では、パワポのファイルが壊れようと、PC がフリーズしようと、日本人が相手なら 3～4 時間ぐらいはしゃべっていただける自信がある（いや、やったことはないんですが、ね）。

で、冒頭に戻ると、デスクワークと比べれば、やっぱり講演のほうが好きなんだけど、講演するための資料作成や確認作業（デスクワーク）は、へたすると、本番の 10 倍ぐらいの時間がかかるのでありました。それじゃ、私はやっぱりデスクワークのほうが好き？

以上は、日本語でやるときのお話。外国語でやるには別の苦勞が、というお話はまた次の機会に。。

